

《研究資料》

〈翻刻〉 中院文庫蔵『古今序抄』と東山御文庫蔵『古今和歌集聞書』序注（上）

橋本 正俊

京都大学附属図書館中院文庫蔵『古今序抄』（中院VI 50）と、東山御文庫蔵『古今和歌集聞書』（勅174／2／6）の序注部分を、対照しつつ翻刻する。

両書を最初に紹介したのは、片桐洋一氏である。片桐氏は『中世古今集注釈書解題二』（赤尾照文堂、一九七三年）八五～九三頁、また『同五』（同、一九八六年）四五～六九頁で、両書の一部を引用しつつ、その特徴について言及している。片桐氏の指摘を、少々乱暴ではあるが簡略にまとめると、次のようになる。

中院文庫蔵『古今序抄』（以下、中院本）は『古今和歌集』の序注のみからなり、東山御文庫蔵『古今和歌集聞書』（以下、東山本）は序注と歌注からなる。中院本と東山本序注は近似する本文を持つ。また、東山本歌注は、京都女子大学図書館吉澤文庫蔵『相伝秘要蜜勘抄』（巻八～十四の歌注のみ現存）と近似する本文を持つ<sup>①</sup>。したがってこれらは同種の注釈書であると言える。これらには「朱云：」「朱陽抄云：」とする引用部分が多々見られる。この「朱陽抄」はその記述から二条家の注釈書と考えられる。したがって、一群の注釈書は、二条家、それもおそらくは、その末流の人々によって用いられたものではなかったかと考えられる。

片桐氏による紹介の後、特に両書の内容に踏み込んだ研究は見られない。けれども、『古今集注釈書伝本書目』（勉誠出版、二〇〇七年）に代表されるように、古今集注釈書の諸伝本の整理が進むことで、他の伝本との関係が幾分か明らかになってきた。例えば、

宮内庁書陵部蔵鷹司本『相伝秘要蜜勘抄』の歌注（巻八〜二十のみ現存）も、右の吉澤文庫蔵『相伝秘要蜜勘抄』とほぼ同文であることが確認された。さらに、この鷹司本の序注は、今回翻刻する中院本とほぼ同文である。また、冷泉家時雨亭文庫蔵『古今和歌集聞書 恋部口伝』（巻十一〜十五の歌注のみ現存）が、東山本歌注にかなり近い本文を持つことも指摘された<sup>(2)</sup>。

ここに翻刻するのは、中院本と東山本序注（歌注は省く）である。前述の通り、両書の本文は近似するが、それぞれに誤写と思われる箇所が多数あり、また細部には異なる箇所も多い。併せて参照することで、注釈の意をよく掴むことが可能となる。その注釈方法は、片桐氏も指摘するように、朱陽抄を引いた上で、自説を提示する形を取ることが多い。両書とも近世写本であるが、内容は中世に遡るものが多く含まれると考えられ、興味深いものも散見する。一例を挙げれば、下照姫について「下照は面足尊の御娘也。陸奥王田理の姫の尊の事也」（中院本7ウ）とある。下照姫の別名を赤玉由理姫（「陸奥王田理の姫」は誤写であろう）とするのは、能基注（三流抄）などにも見られるけれども、面足尊（『日本書紀』では神世第六代）の娘とするのは注目される。下照姫は『書紀』巻第二に「顕国玉の女子下照姫」とあり、顕国玉（大國主神の別名とされる）の娘とされていることと大きなずれがある。ただ、面足尊の娘とする説は次のような諸注釈と関わってくる。すなわち、鎌倉時代末頃成立かと考えられる『古今和歌集三条抄』では982番「わが庵は」歌注に、「三輪明神ハ湯津玉姫ト申候。序ニ下照姫ト申ハ此御事也」として、下照姫＝三輪明神＝湯津玉姫という解釈を示している（湯津玉姫については未詳）。他方、成立背景は不明ながら『古今無名作者抄』は「わが庵は」歌注で、湯津玉姫を「三輪明神御事。陽神第六面足夫婦惶根御姫也」とする。湯津玉姫＝三輪明神は神世第六代面足尊と惶根尊の娘であるということだろうか。さらに『毘沙門堂本古今集注』は1009番「初瀬川」歌注で、「三輪ノ大明神ハ面足ノ尊ノ御子也」と注している。これらを併せ見るに、中世歌学において、下照姫を三輪明神及び湯津玉姫と団体とし、さらには面足尊の娘として解釈する流れがあったことが読み取れる<sup>(3)</sup>。

中院本は京都大学附属図書館ホームページ「貴重資料画像」に公開されていて、東山本は宮内庁書陵部でマイクロフィルムを閲覧することができる。けれども、右に例を挙げたように、伝本によって大きく内容の異なる中世古今集注釈書の本文を少しでも読みやすい形で提供することは、多少なりとも意義のあることと考え、翻刻を公刊する次第である。紙幅の都合上、上下二回に分けて翻刻する。

なお、東山本は原本の閲覧ができないため、翻刻は右マイクロフィルムに拠ったが、5ウ・6オの1コマが欠落している。やむを得ず今回はこの部分の翻刻を見送ることとした。

〔注〕

（1）『相伝秘要蜜勘抄』は、中前正志・柴田清子「京都女子大学図書館古澤文庫所蔵『相伝秘要蜜勘抄』翻刻」（『国文論藻』16、二〇一七・3）に翻刻がある。

（2）冷泉家時雨亭叢書『上抄抄 古今和歌集古注』（朝日新聞社、二〇一七）解題。

（3）中世の古今集注釈における下照姫の位置づけについては、拙稿「下照姫の歌―中世の古今集序注から―」国文学研究資料館編『中世古今和歌集注釈の世界』（勉誠出版、二〇一八）も参照されたい。

※中院本は画像が公開されていることから、また東山本は一部分の翻刻であることから、それぞれ翻刻許可の申請は必要とされなかった。  
本研究はJSPS 科研費 JP18K00305 の助成を受けたものです。

〔凡例〕

- ・ 上段に中院本を、下段に東山本を掲げた。
- ・ 漢字は通行の字体に改めた。
- ・ 適宜句読点、清濁を施した。
- ・ 半丁の末尾を「（1才）」のように示した。
- ・ 注釈の内容に応じて適宜改行し、段落を設けた。逆に、元の本文で改行されていた箇所もある。
- ・ 両書の対比のため、段落の冒頭を上下段で揃えた。途中の空白はその措置によるものであり、元の本文に空白はない。
- ・ 元の本文に関わらず、和歌はすべて改行し二字下げにした。
- ・ 中院本には朱で合点等の記号が多数付されているが、省略した。ただし、朱による振り仮名は翻刻した。墨による振り仮名とは区別していない。
- ・ 東山本の振り仮名には後筆と思われるものも複数あるが、煩雑になるためその一部は省略した。
- ・ 翻刻が困難な文字は\*□とし、段落の末に\*として説明を加えた。説明中に「鷹司本」としたのは、鷹司本『相伝秘要蜜勘抄』序注を指す。

## 中院文庫蔵『古今序抄』

やまと歌は人の心をたねとして、よろづのことはとぞなれりけるといふ事は、まづ、やまと歌と云、やまととは、此国の惣名なり。天神七代にあたり給ふ、いざなぎ、いざなみの尊、このふたりの御神、あまのうきはしのうへにて、あひともにはからひていはく、此したにむげの宝珠をうづもれし、豈国土のなからんやとて、あめのにぎの鉾をさしおろしさぐり給ひしに、時におほうみはあをきうなばらなり。たゞほこのみひきあげ給へば、」(1オ)そのしたよりこりかたまりて、一の嶋出現したり。その嶋をおのころ嶋と云なり。かのしまにあまたの義あり。そのしまよりことおこりて国出来て、大日本国となづけたり。是をやまとの国と名付、そのくにの風俗として大和歌と云也。

一、問云、やまと歌と云、如何義ぞ。<sup>イカナル</sup>答、是に三の不同ありといへり。一には、一切の草木山河万物をやはらげて、卅一字につらぬる故に、和歌と云也。二には、天竺の乱文は六義こもりて句をととのへざる也。」(1ウ)それをうつして詩賦とせり。<sup>キセイ</sup>希世卿、吾朝にうつして歌とす。三の躰やはらぐる故に、和歌とする也。たゞ天神の時よりおこりて、日本の風俗たり。なにか大唐よりうつすといふべきや。六義相伝の事なり。たけきものゝ心の心をもやはらげ、鬼神をもしたがへやはらぐる故に、大和歌と云り。

## 東山御文庫蔵『古今和歌集聞書』

朱云、大和歌ノ大和ハ此国ノ名ナリ。天神七代ニ当、伊弉諾、伊弉冉尊、此二神、天ノ浮橋ノ上ニテ、共ハカリテ曰、<sup>イハク</sup>此下ニ豈国ナカラシヤトテ、天ノニ申鉾ヲサシオロシテサグリ給シニ、青キウナバラアリ。其鉾シタハリ、一ノ嶋トナル故ニ、天地別タリ。

大和歌ト云、何義哉。答、三ノ義不同有。一ニハ、一切」(1ウ)草木山河万物ヲ和シテ、三十一字ニツラヌル故ニ、和歌ト云也。二ニハ、天竺ノ乱文ハ六義ヲコメテ句ヲト、ノヘザル物也。夫ヲ羅<sup>ラ</sup>什大唐ニウツシテ詩賦トス。<sup>ジウ</sup>ソレヲ<sup>マレ</sup>希世卿、吾朝ニウツシテ歌トス。三代和故ニ、和歌ト云也。問、歌ハ天神ノ時ヨリオコリテ、日本ノ風俗タリ。何ゾ大国ヨリウツスト云哉。答云、此ハ詠ニハアラズ。六義相伝ノ事也。三ニハ、武物ノフノ心ヲモ鬼神マデモ心ヲヤハラグル故ニ、大和歌ト云。」(1ウ)

抑、玉伝をみるに、和歌は是神明の心地、万物の性相也。その色  
 軀虚空のごとし。手にとる風情法界にみつ。寄心言語有世と謂り。  
 されば大和歌（2才）とは、三世諸仏化現し給ふ和光同塵也。常  
 没の衆生を導<sup>ミテビカン</sup>が為に、自性法身の妙理をやはらげ、真如実相の  
 法門を草木土砂によそへて、愚迷の風月となすを歌といへる也。  
 文字を法とよめり。隱遁修行のみなもと、出離生死の要術也。文  
 選云、花月詠之謂は、勸情妹艶断也。有道には歌在人の心、され  
 ばうたは御のりなり。五七五七々三十一字の文字をなぞらふる事、  
 其義風也。

朱陽抄云、花に鳴うぐひす、又水にすめる蛙のこゑを聞ば、みな  
 歌也。毛詩の序に云、詩（2ウ）は志之所有心為志發言為詩、動  
 於中而形於実。心にあるを志となづけ、言にあらはるゝを歌と云。  
 然に、うぐひす蛙も志を延るを歌と云也。陽神いざなぎの御歌、  
 みとの幕這して、

あなうれしいまめの子にあひぬ喜哉、遇可美女少  
 と云々。

はなに鳴うぐひす、水にすめる蛙までいきとしいける物うたをよ

抑、玉伝ヲ見ニ、和歌ハ是神明ノ心地、万物ノ性相也。其色軀如虚  
 空。手ニ取ニ風情満法界、寄心言語有世ト云リ。サレバ大和歌ト  
 ハ、三世諸仏化現和光同塵ト成テ、常没ノ衆生ヲ導<sup>ミテビク</sup>ガタメニ、  
 自性法身ノ妙理ヲヤハラゲ、真如実相ノ法門ヲ草木塵沙ニヨソヘ  
 テ、愚迷<sup>グ</sup>ノ風月トナスヲ歌ト云。文字ヲ法トヨメリ。隱遁<sup>インテン</sup>ノ源、  
 出離生死ノ始ナリ。文選云、花月詠之語ハ、勸<sup>ナサテナカダシイダシ</sup>情媒艶断之。  
 有道ニハ歌在三人（2才）心、サレバ歌ハ御法ナリ。五七五七々  
 三十一字文字ヲナゾラフル事、其義フカシ。

朱云、華ニ鳴鶯、又水ニ栖河津ノ声ヲキケバ、毛詩ノ序曰、詩者  
 志之所有<sup>チニ</sup>心<sup>アラハ</sup>為<sup>レ</sup>志<sup>アラハス</sup>發<sup>レ</sup>言<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>詩、動<sup>チニ</sup>於<sup>ニ</sup>中<sup>アラハ</sup>而形於言<sup>ニ</sup>。心ニア  
 ルヲ志ト名ケ、言ニアラハル、ヲ歌ト云。然バ、鶯カハツモ各志  
 ヲ述ヲ歌ト云也。

陽神イザナギノ御歌、ミトノマグハヒシテ、

アナウレシヘヤ、ウマシヲトメニアヒヌ（2ウ）喜哉、遇<sup>ウレシヤ</sup>可<sup>アヒヌ</sup>美女少<sup>ニ</sup>

可美女少<sup>ニ</sup>

陰神イザナミノ尊ノ御歌ニ、

喜哉、遇<sup>ニ</sup>可美女少男<sup>ニ</sup>。

此歌ノ心ハ、ヨキ男ニアヒヌ。明神如<sup>カクノ</sup>レ斯。

一、花ニナク鶯、水ニスムカハヅ、イキトイケル物歌ヲヨムト云、

むと云也。日本記云、聖武天皇の御時、大和国紫藤の中納言伴の宗冬と云人あり。かれが子をもちて久米寺にのぼせてありけり。おもはざる外に死にけり。のち」(3才)にうぐひすとなりて、わがすむ寺の坊の軒端にとびめぐりてさへづる様、初陽毎朝来不相還本栖と鳴けり。かの児の師匠かの子のおもひに沈て、書院にありしが、此鶯の音を心<sup>\*</sup>を付て聞ければ、おもしろく鳴也。つれづれのあまりに文字にうつして是をよむに、たゞみそじひともじの詠歌になる也。

はつ春の朝ごとには来れどもあはでぞかへるものと栖にとさへづりけり。それよりうぐひすの歌とて世に弘<sup>ヒロミヤレ</sup>り。

一、水にすめる蛙の歌をよむと云事、大和物語の注」(3ウ)に云、孝謙天皇<sup>カウケン</sup>の御宇、紀良定先祖、住吉の浜に出て忘草とらんとしけるに、美女一人来りたり。とかくいひよりて語ひ具してかへり、宿に一夜を契る。あければかへる。いづちより来りたりともいはねば、出所心もとなくて、かへるあとに見かくれ行てみれば、はまに出てとかくせしが、搔けつやうにうせぬ。かの女のたちやすらひし所へはしり行てみれば、蛙のひとつとびゆく跡をみれば、こまかなるいさごのうへに文字のやうなるあり。しづかにみれば歌也。いはく、

住吉の浜のみるめし忘ねばかりにも人の又たづねつる」(4才)

何哉。日本記云、聖武天皇<sup>シヤウ</sup>ノ御時、大和国紫藤ノ中納言伴宗冬<sup>トモノ</sup>ト云有<sup>レ</sup>人。彼子ヲクメ寺ニ上テ有ケリ。死テ鶯トナレリ。其歌云、初陽毎朝来不相還本栖<sup>セイ</sup>トアリ。私<sup>ワタクシ</sup>云、」(3才)

ハツ春ノアシタゴトニハキタレドモアハデヅカヘルモトノスミカニ

カヤウニヤ。

水ニスムカハヅノ歌ヲヨムト云事、大和物語ノ註<sup>チウ</sup>ニアリ。孝謙天皇<sup>ケン</sup>御宇、紀良定<sup>ヨシサダ</sup>先祖、住吉ノ浜ニワスレ草トラントシケルニ、美女一人来ル。カヘルニ変ジテハヘルアト歌也。其歌ニ云ク、  
住吉ノハマノミルメシワスレネバカリニモ人ノ又タヅネツル  
万葉ニカハヅノ女ノ歌トテアリ。

是かはづの歌の証拠也。

いきとしいける物みなうたをよむと云事、一切の生類みな五行を以て身軀とせり。故に万生の声、五行の響なり。故にいきとしいける物歌をよむと云也。俊頼閑見集に云、森羅万像は三十一字の変作有情非情の音、歌詠のいたす所也。是非情草木皆五行を軀とす。又歌に事理あるべし。自性常不滅の軀、すなはちことばりの歌也。万物の音声形相軀は皆事の歌也。

朱云、天地をうごかすと云事、目にみえぬ鬼神の心をも和る也。此大和歌にしくはなし。毛詩にいはく、動天地感鬼<sup>一</sup>（4ウ）神莫近而詩、千三以是和夫婦成孝敬厚人倫美教化、移風易俗詩徳。如此歌も是におなじかるべし。

ちからをもいれず、天地をうごかす事、天地は五行也。陰陽也。天は陽木火金、地は陰土水也。されば天地五行是を以てあめつちをうごかすと云也。いかんとなれば、卅一字五行合成なる故に、一首をよむは、天地をうごかす也。又天神七代、地神五代より世に伝るゆへに、天地をうごかすと云也。

目に見えぬ鬼神をもあはれと思ふと云は、日本紀にいはく、天智天皇の御宇、笠氏の將軍千方と云人、伊賀伊勢の両<sup>一</sup>（5オ）国を押へ取事あり。勅使中納言紀朝雄<sup>アサヲ</sup>愛にむかふ。その所の四鬼と云荒者あり。金鬼、風鬼、一鬼、木鬼と云也。かれをせめし時に、朝<sup>アサ</sup>

一、イキトシイケル物皆歌ヲヨムト云事、一切ノ生類皆<sup>ヒミキ</sup>（3ウ）五行ヲ以テ為身軀。故ニ万生ノ声、五行ノ響ナル故ニ、イキトシイケル物歌ヲヨムト云也。俊頼閑見集ニ云、森羅万像者三十一字ノ変作有情非情ノ音声、歌詠ノ致処<sup>イタルロ</sup>也。是非情草木皆五行ヲ為軀故也。又歌ニ事理アルベシ。自性常住不滅ノ軀即理ノ歌也。万物音声形相<sup>ケヒ</sup>軀ハ皆事歌也。

朱云、天地ヲ動スト云、目ニミエヌ鬼神ノ心ヲモ、毛詩序曰、動<sup>二</sup>天地<sup>一</sup>感<sup>二</sup>鬼神<sup>一</sup>莫<sup>レ</sup>近<sup>二</sup>而詩<sup>一</sup>、千三以<sup>レ</sup>是和夫婦<sup>二</sup>（4オ）成孝敬<sup>一</sup>厚<sup>二</sup>人倫<sup>一</sup>美<sup>二</sup>教化<sup>一</sup>、移<sup>レ</sup>風易<sup>レ</sup>俗詩徳。如<sup>レ</sup>此歌モ是<sup>二</sup>同也<sup>一</sup>。

一、カヲモ不<sup>シテ</sup>入、天地ヲ動ス事、天地ハ五行陰陽也。天ハ陽木火土也。地ハ陰金水也。サレバ天地五行是ヲ以アメツチヲウゴスト云也。如何トナレバ、三十一字五行ナルガ故ニ、一首ヲヨメバ、天地ウゴク也。又云、天神地神、哀<sup>アヘ</sup>ヲタル、故、天地ヲ動スト云。又天神七代、地神ヨリ世ニ伝ル故ニ、天地ヲ動スト曰。（4ウ）一、目ニミエヌ鬼神ヲモアハレトオモハスルト云、日本記云、天智天皇御宇、笠ノ氏ノ將軍千方<sup>チカ</sup>ト云人、伊賀伊勢両国<sup>フントル</sup>ヲ押留事、勅使中納言紀朝雄<sup>トモ</sup>向ウ。其所ノ四鬼ハ、金鬼、風鬼、一鬼、水鬼也。カレヲ責シ時、朝雄<sup>トモ</sup>ノ歌ニ云、

雄が歌をよむ也。

草も木もわが大君の国なればいづくを鬼の郷と定めん

とよみければ、四の鬼ども此歌を聞て感歎し余て、すなはちうせにけり。是しかながら鬼もやはらざたりとなん。

一、神の歌にめで給ふ事、いせ物語にいはく、文徳天皇すみよし御幸の時、

吾みても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いく代へぬらん

とあそばし給へば、宝殿「(5ウ) うづき渡で、扉トビラからとあきて、からびたる声にて、たれいふとしもなく返歌あり、

むつまじと君はしらずや水垣の久しき世より思ひそめてき

とあそばしたるは、明神御納受あり、あそばされたりと云々。是すなはち神もめで給へる本歌也。

猛タケキ武士と云は、廢帝天皇の御宇、中丸大臣よせて御門をうたんとありし時に、廢帝あそばされしと也。

厭世と思へどおしき命かな草木の露のしばしばかりも

此歌は六帖にあり。中丸思ひやはらぎて討たてまつらず。横萩右大臣豊成と云逆臣の一男なり。

朱に云、御「(6オ) 殿幕トシマツハイ這してよめる歌を、天まつ成て地のちに定る、然のち神うまる。その中に、いざなぎいざなみのみこと天くだり、うき橋たて、夫婦となり、山河草木等、日神月神をうみ、

草モ木モ我オホキミノ国ナレバイヅクカ鬼ノ里トサダメン

此歌ニコリテ、鬼シタガヒテウセニケリ。

一、神ノ歌ニメヅル事、伊勢物語云、文徳天皇住吉ニ行幸ノ「(5オ)

※5ウ・6オは、現在は本文を確認できないため、翻刻を見送る。



一女三男と云也。日神は伊勢太神宮、月神は春日大明神、蛭子は西宮、素盞は出雲国に嫁す。<sup>メトリ</sup>四神をうみ給ふ。天照太神を国のあるじとさだめ、三神を以て諸国をゆづり給ふ。此時いざなみの御歌をよみ給ふ。いざなぎに送り給ふ歌、これ卅一字の始也。日本記にいはく、

うば玉の我くろかみもみだれずのむすびさだめよ小夜の手枕とあり。此歌、卅一字の第一也。」（6ウ）

一、久堅と云は、天の名也。是はいざなぎいざなみの国土をつくりて、十方をさだめし時、空はかぎりなければとて、ひさかたの空と云り。

あめにしては下照姫にはじまると云は、そさのうの尊、天照太神をうち奉るとて、大国のみことゝかの悪神一千神集て、大和国宇多郡そなへが城に押寄給ふ。天照太神よしなしとて、天のいはとにとちこもり給ふ。かつらぎ山たかまの原是也。天間が原の内まで下照姫は天照太神に属奉り給てましましけるが、天照太神にとり給はずみめいつくしくおはしましけり。さてこそ下照姫とは申けれ。あまりに」（7オ）光四方山谷にうつりてかゝやきけれ、かゝやく日の尊とも申けり。生馬武見<sup>ウバタケミ</sup>と云神、思をかけて送る歌也。

相事之思難<sup>シ</sup>忘念我妻之妙<sup>ル</sup>光見律々古曾經

一、久方ト云ハ、天ノ名也。是ハイザナギイザナミノ国土ヲツクリテ、十方ヲ定シ時、天ハカキナレケレバトテ、久方トイヘリ。

アメニシテハ下テルヒメニハジマリト云ハ、素戔嗚尊、天照太神ヲ打奉ラントテ、大<sup>オホ</sup>□<sup>ネ</sup>ノ尊等<sup>ラ</sup>、悪神一千集<sup>アツマテ</sup>テ、大和国宇多野ニヨセタリシニ、天照太神ヨシナシトテ、アマノウキハシノ岩戸ニ籠タマフ。カツラギ山ニアリ。タカマノハラ是也。天間原也。此時下照姫天照太神ニツキ奉テ<sup>マシヤシ</sup>坐ケルガ、御」（6ウ）ミメノウツクシクテ、光ノヲカ谷ニウツリテカゝヤキケルヲ、生馬武見ト云神、オモヒカケテ読テ送ル、

相<sup>フ</sup>事<sup>コト</sup>ハ思難<sup>セ</sup>糸我妻<sup>セコノメ</sup>妙<sup>ナル</sup>光<sup>リ</sup>見津々古<sup>コ</sup>曾經<sup>フル</sup>

生馬武見ハエビスノ王也。サレバ彼歌ヲエビス歌ト云。此歌三十一字ノ第二番之歌也。天神ノ時歌アリトイヘドモ、皆文字ヲ不定

生馬武見は多びすの神也、王なり、さればかの歌をえびすうたと云也。此歌卅一字の第二の歌也。天神の時の歌也。其時の歌ありといへ共、みな文字をさだめざる歌也。

一、せうとの神と云は兄<sup>アニ</sup>の神と云也。下照姫はうばたけみの神には兄也。下照は面足尊の御娘也。<sup>アカシ</sup> 阿閼王<sup>タマサ</sup> 田理の姫の尊の事也。あめわか君はかの姫の夫也。大戸之道尊の御子氣長足珍尊。此二人は天照太神に着奉て「(7ウ) 御座しけるとかや。

五行性虚空にありし、国土あらはるべきいはれありて、一の露となしつるを、いざなぎと申也。日本記には種を蒔と云。伊奘冉をたねをおさむると云。

日神月神等<sup>トツ</sup>みな五行の性なる故に、五方にわかつて五仏となる。此五仏すなはち五帝の尊也。日神は仁、ひがしをつかさどり給ふ万物をあはれみ給ふ心なり。すなはち春にしてあをし。蛭子は礼、南をつかさどる、夏なり。あかし。生類をはごくむ神也。此神生て骨もなし。ねり衣に物をつゝみたる如し。是神にあらざとて南海にすつ。龍神とりあげ子として「(8オ) そだてたり。三歳にてはじめて足手いできにけり。万云、

かぞいろはいかにあはれと思ふらん三年に成ぬあしもたゝずて南は火の方也。その身あかし。礼は尊敬の心也。故に下神と成て諸神をうやまふ。修行の方也。宝性仏なり。素盞烏尊は西をつか

也。

\* 「」構に「土」のような文字だが不明。

セウトノ神ト云ハ兄ノ神ト云也。下照ヒメハウバタケミニハ兄ナリ。下照姫ハ面足尊<sup>オモタルノ</sup>ノ御娘<sup>アネアカ</sup>阿閼王<sup>オホ</sup> 田理ノ姫ノ尊事也。アメワカミコハ「(7オ) 彼オトコナリ。太戸之道尊<sup>オホ</sup>ノ御子氣長足珍司ノ尊。此二人ハ天照大神ニツキ奉テオハシマシケルトカヤ。

五行性虚空<sup>セイコ</sup>ニアリシガ、国土<sup>アラハル</sup>顕ベキ謂レアリテ、一露<sup>ツユ</sup>トナリシヲ、イザナギト云。日本記ニハタネヲマクト云。イザナミヲバタネヲハサムトヨメリ。

一、日神月神等皆五行ノ性也。故ニ五方ニ分テ五仏トナル。此五仏即五常ノ尊也。日神ハ仁、東ヲツカサドル、物ヲアハレム心アリ。春、青色也。発心ノ方、阿閼「(7ウ) 仏ノ土也。性ハ木。蛭<sup>ヒル</sup>子ハ礼、南ヲツカサドル。此神生レテホネナシ、ネナシ。ネリギヌニ物ヲツゝミタルガ如シ。是神ニ非ズトテ南海ニスツ。龍神子トシテ、三歳ニテ始足手イデキニケリ。万葉云、

カゾイロハイカニアハレト思ランミトセニナリヌアシタゝズシテ

南火ノ方也。其身アカシ。礼ハ尊敬ノ義也。故ニ下神ト成テ諸神ヲウヤマフ。修行ノ方也。宝生尊也。色赤也。素盞烏尊ハ西、秋

さどり給ふ。秋は義也。性金也。色は白帝也。菩提の方、阿弥陀也。義は物をさだむる也。かねは物をさる也。其徳すぐれたり。故<sup>カル</sup>に此神善悪に付て物をきはむる故に、たとへて金を性とす。月神は北方、智也。水をつかさどりて万物をうるほす神也。智は万生を只すくう故に、智すなはち釈迦也。」（8ウ）月は陰也。北は水也。色くろし。ねはんの方也。悲の道也。不空成就の土也。台合<sup>タイガウ</sup>して天照大神、信也。中央として不動の義也。性は土也。つちは中央也。万物養育の故に、天照の神は国土のあるじと成て、金神をめぐみ給ふ。土と金と不合なる故、天照太神、そさの尊と中惡也。四神五仏と成る、秘する所也。

朱云、あらかねの土にしてはすさのをのみことよりの時ぞ、是は地にて歌よむ事は、そさのをの時よりはじまると云事也。そさのを、いづもの國會我の里籙の川かみと云所に、宮作し給はむとて尋給ふ時、嫁給ふ事ありて、卅一字を始て」（9オ）よみ給ふ。

あらがねのつちにしてはとはなん云事、日本のはじめつかたは石金にて土なし。しかる時の事也。

天照太神宮の岩戸にとぢ籠給ふ時、嶋根尊をはじめとして八百万の神たち、やまとの国あまのかぐ山に燎<sup>ニヘヒ</sup>を焼て、鏡を鑄給ふ。それをさか木のえだに付て、天照太神の御形をみると、神歌を謳

方義ナリ。性金、色白シ。菩提方、阿弥陀仏、土也。義ハ物ヲ定ム。金ハ物ヲキル。以テ徳トス。故ニ此神善悪ニ」（8オ）付テモノヲ極<sup>キムル</sup>ムル故ニ、タトヘテ金ヲ性トス。月神北方、智方也。水也。万物ヲウルホス。智ハ万生ヲ救故ニ智トス。月ハ陰也。北ハ水ナリ。色黒シ。涅槃<sup>ネ</sup>ノ方也。カナシミノ色也。不空成就仏土也。中央ハ天照大神也。信也。信ハ不動ノ義ナリ。性土也。土ハ中央ニテ万物ヲメグム故ニ、天照大神ニテ国ノ王ト成テ、余神ヲメグム。土与金ハ不合ナルガ故ニ、天照大神、索戔鳥尊中アシキ也。以四神五仏ニナス、秘スル事也。

朱云、アラカネノツチニシテハスサノオノミコトヨリゾ、是ハ」（8ウ）地ニテ歌ヨムコトハ、スサノオノ時ハジマルト云事也。スサノオ、出雲国索<sup>ソ</sup>我ノ里<sup>リ</sup>籙<sup>リ</sup>ノ川上ト云所ニ、宮作シ給フ時ノ歌也。

八雲タツイヅモヤヘガキツマゴメニヤヘガキツクルソノヤヘガキヲ

一、アラガネノ土ニシテハト云事、日本ノハジメイマダ石金ニテ土ナカリシ時ノ事也。

一、天照大神アマノ岩戸ニ籠給フ時、嶋根尊ヲ始トシテ八万ノ神達、大和国アマノカグ山ニ遅火ヲタキテ、鏡ヲ鑄<sup>イル</sup>。ソレヲ神ノ枝ニ付テ、天照大神ノ御形見ントテ、神歌ヲウタ」（9オ）ヒテ遊ビ

てあそびければ、太神、手力男の尊に岩戸を明させ給てのぞき給ふ。其時国土うすくとあかくあきらかに、神達のおもてしろくく見えたりしかば、面白と云也。あるいは、たちからをの岩戸の口に立てひきあけて」(9ウ)とり出し奉るとも謂り。

そさのをのみことをひ出す。すみ所ましまさずしてまよひありきて、出雲国曾鷲郡貞満テマの里に至りぬ。爰にいなだ姫にあふ相あり。父脚摩乳、母手摩土、かの夫婦の翁ひとりの姫をいできて鳴居たり。みことふしぎの思ひをなし、泣は何者ぞと尋て行て見給ふに、姫をかいしやくして涕、汝何者ぞと宣へば、我は国津のすゑの翁也。何の故に子を抱涙根イルキルイコンするぞと問給ふ。翁のいはく、此いだき歎く所のひめは、我がをと子なり。惣じて我八人の娘あり。此山に大蛇すめり。一年に一人」(10オ)宛とりくらはれて、此子ひとりになりぬ。今年またおろちの為にかれをうしなはん事をなげくなりと申す。汝等が名はいかにと問給ふ。我は脚摩乳、姫をば手摩土とこたふ。汝がむすめを吾に得させよ。喰所カトツの大蛇うちてとらせんと宣ふ。二人の斜ならず領掌す。その時大蛇うたんとのはかり事おほかりけり。今年はうみよりあがるべしと云、さてはとて船八艘つくりて、毒の酒をわかつて船ごとに入て、おなじくさし櫛とて、姫がすがたを人がたにつくり、船のうへごとにつりて、松の篝火を焼て海辺に押浮て置」(10ウ)たり。則海上

ケレバ、大神、手力男尊タカラオノニ岩戸ヲアケサセテノゾキ給フ。其時国土アキラケシ。神達ノ面ノシロク見エタリシカバ、面白キト云也。或ハ、手力男岩戸ノロニ立テヒキアケテ取出シ奉ルトモ云。

サテ、索裘烏尊ヲ追出。栖所ナクテ迷アリキテ、出雲国ソガノ里テマノ関ニ至ヌ。イナダココニ稲田姫ニアフ。父脚摩乳、母手摩、大蛇ヲバ八頭龍ヤマタノヲロチ八岐大蛇ヤマタノヲロチ陽津ノ爪櫛トハ海松ノカウガイナリ。稲田姫ノ頭ニサス。索裘烏其所ニ行タマフ。帝泣ノ声アリ。」(9ウ)尊事ノユヘヲ問給フ。叟、此山ニ大蛇アリ。毎年ニ生贄イケニヘヲソナフ。今日我一娘アネニアタレリ云々。其ノ蛇尾ト頭トハアリ、八谷ニハバカレリ。尊計テ八ノ谷ニ各窯ヲスヘテ酒ヲ入、大蛇出テ飽マデ飲醉アケノクニユイヌ。其時尊トツカ劔ヲ以テ大蛇ヲ切。其尾ノ中劔アリ。天ノ村雲ノ劔ト云。常ニ村雲ノウヘニカ、リケレバ云也。サテ稲田姫ヲ妻トシ給フトキ、卅一字ニ歌ヲヨマムトテ読給ヘル歌、

ヤクモタツ、々、

此歌卅一字第三番歌也。

動揺して、八頭蛇忽にやつのかしらを八艘のふねへ差入て、姫を  
のむこちして毒の酒をのみほしたり。次第酒酔いてければ、身  
くるしくたましあみだれて、胸もみ骨肉よだれければ、陸にあが  
りてひれころび、いきすだきなやみける所を、みこと十握ツカの劔と  
申すつるぎにて、豆太ツダくに切給ひぬ。尾二肋あり、ひとつの尾  
より八色の雲たちけり。みことあやしめて劔にてさしてみ給へば、  
物の堅がさはりたり。割て見給へば劔あり。とりて国土の重宝と  
す。すなはち村雲の劔是也。八雲たち出るにより＊□□□（11オ）て、や  
がて国を出雲の国と号す。その後、姫を妻とさだめて殿を作て、  
猶大蛇の亡魂をおそれ給て、八重ヘに垣をして中に囲饒イネリす。その歌  
に云、  
トリコメ

八雲たついつも八重垣妻籠に八重垣つくるそのやへがきを  
とあそばしたり。それより人の世にいたるまで歌のみちたえず。  
地にてよみ給ふ歌、卅一字の第三番也。しかく神道御書にあり。

＊「アラア」に見えるが鷹司本「アラカ」が正しい。

朱に云、茅破屋チワヤぶる神代には、異なる心わきがたし。人の世とな  
り歌もすみやかなり。そさのをの尊、天神よりしかあるを、人の  
世となり、卅一字さかりに（11ウ）よむべしとなり。

朱云、チハヤブル神代ニハコトノ心ワキガタカリケラシ。人ノ代  
ト（10オ）成、スサノオノミコトヨリゾ、ミソモジアマリ一文字  
ハヨミケル。スサノオ天神也。シカルヲ人ノ代トナリテ卅一字サ  
カリニヨムベシトナリ。ソレヲヨミハジメタマヒシカバ、人ノ代  
トナリテト云也。

それをよみ始て、地はやぶると云に、四の義あり。一には、八つの劔とて枝の八あるつるぎを一千、そさのをのみこと振立て井\*□たりしを、太神一足に踐破給へるより、ちはやぶると云也。二に、かつらの宮に太神坐し也。茅<sup>チ</sup>の葉の家にすみ給ふに、悪神よせたりしにやぶり出給しより、茅葉破ると云也。三に、天の香久山<sup>アマ</sup>にて神達舞遊び<sup>アソ</sup>しに、ちはやの袖に岩戸をひらき給へば、御ひかりを身にふるゝを、ちはやふると云也。可秘。天照太神に万の神達ちはやの袖をふりしなり。されば諸神に渡るべし。

\*「慍」のような字。鷹司本「垣」。

おなじく」(12オ) そさのをの尊、天照太神のこの神と云は如何。養君にし給ひて、いつもの国をゆづりて十月を讓給ひて、諸神を哀むによりて、このかみと云ぞ。又兄の義もありつべし。

一、花をめでゝは春の鳥をうらやみとは、鶯の鳴こゑおもしろきを云也。霞をあはれみとは、風晴やすきを云。露をかなしぶとは、きえやすきを云。

朱に云、ちりひぢとは、ちりいぢと云流もあり。つみぢをつみひぢとかきたるを、つちのやぶりたるをつみぢのくづれよりと云也。」

(12ウ)

一、チハヤブル神代トハ天照大神ノ代ノ始ナリ。チハヤフルト云ニ、四ノ義アリ。一ニハ、八ツハノ劔トテ枝ノハアルツルギヲ一千、索戔鳥尊ホリタテ、ギ給タリシヲ、大神一足ニケ破リ給ヘルヨリ、チハヤブルト云。二ニハ、カツラノ宮ニ天照大神」(10ウ)坐シ也。チノハノイヘニスミ給ヒシニ、悪神ヨセタリシニ破出給シヨリ、チハヤブルト云。三ニハ、天ノカグ山ニテ神達マヒ遊シニ、チハヤノ袖ニ天照大神ノ岩戸ヲ開キ給ヘル、御光ヲフル、ヲ、チハヤフル、トカキテ、チハヤフルトヨメリ。万ヅノ神達チハヤノ袖ヲ振シ也。サレバ諸神ニワタルベシ。

問、スサノオノ尊、天照大神ノコノ神ト云如何。答曰、養子ニシ給テ、出雲国ヲ讓テ十月ヲユヅリテ、諸神ヲアハレムニヨリ、コノ神ト云。又兄ノ義モ有。

朱云、花ヲメデ鳥ヲウラヤミ□<sup>(破損)</sup>レハ物ニシタガヒテ」(11オ) 歌ノ心詞ノ多ナル事ヲ云ナリ。

一、華ヲメデハ春ノ鳥ヲウラヤミ、鶯也。鳴声面白キヲ云。霞ヲアハレミハ、風ニハレヤスキ心ヲアハレムベシ。露ヲカナシムハ、キエヤスキヲ云也。

朱云、チリヒヂトヨム、イヂト云流モアリ、源氏ニ、ツヒヂヲツヅヒヂトカキタルヲ、ツイヂノワレメトヨム故ナリ。

一、ちりひぢとは、千里始るあしの下、高山起巖塵を云也。毛詩に云、塵と書り、塵泥共かけり。万葉にいはいく、

吾恋者名於波立妻野少塵之有陸無心成尋里

少塵ともかきたり。

朱に云、難波津の歌は、御門をそへ奉る歌也。此歌は、仲哀天皇第四人皇十六代の帝応神天皇に二人の皇子坐す。兄をば大鷦の御門、弟は宇治邪の御子也。応神位下り給て後、菟道に讓給けり。崩御ありしに、吾弟は先位に付べからず、大鷦の即位し給ふべしとありて、人民の歎斜ならず、魚夫贄を奉るをたがひにうけとり（13才）給はず、みなくさりければ、海人は音を鳴けり。吾故音を鳴と云事、是よりはじまれり。

又曰、難波津の歌は、御門は始と云、人王の始にはあらず、仁徳也。応神天皇に五人の御子坐也。一には高津宮、二に長良宮、三に熊柴宮、四に難波津宮、五宇治雅良御子也。朱云、

難波津に咲や此花冬ごもり今は春辺とさくや此はな

とは御子はよみ給はず。王仁大臣つかまつりしなり。なにはの宮の位に付給ふ事をよめり。

一、安佐賀山の歌は、葛城の王を陸奥へつかはしたりしに、つかさどもをろそかにもてなし、いやしげなる級（13ウ）どもおほくせし也。御酒をもめさず、ましてさかづきをもとりあげ給はず。

一、チリヒヂトハ、千里始<sup>カ</sup>足<sup>ミ</sup>下<sup>ン</sup>、高山起<sup>ヲ</sup>巖<sup>ミ</sup>塵<sup>ン</sup>を云。毛詩云、塵土トカケリ、塵泥トモ云リ。万葉云、（11ウ）

吾恋ハ名ヲ波立妻野少塵之有階<sup>ハ</sup>無心成<sup>テ</sup>尋里<sup>ル</sup>

少塵トモ云リ。

朱云、難波津ノ歌ハ、御門ヲソヘタテマツル歌。此歌ハ、中哀天皇第四皇子人王十六代ノ帝<sup>ミカド</sup>応神天皇ニ二人ノ王子御座キ。兄ハ大鷦<sup>オサ、キ</sup>ノ御門、弟ハ宇治邪<sup>ワカ</sup>ノ御子也。応神位下リテ、菟道<sup>ウヂ</sup>ニ讓給ケリ。サテ崩御<sup>ホウ</sup>アリシニ、我弟ナリ、先位ニ付ベカラズ、大鷦御即位シ給ベシトアリテ、人民ノ歎ナノメナラズ、魚夫贄<sup>ギョフニエ</sup>ヲ奉ヲタガヒニ請取<sup>ウケトリ</sup>給ハズ、皆クサリケレバ、海人ハ（12才）ネヲナキケリ。我物故ニネヲナクト云事、是ヨリハジマリケリ。

一、ナニハヅノ歌ハ、御門ノ御ハジメト云ハ、人王ノハジメニハアラズ、仁徳御門也。応神天皇ニ五人ノ御子マシマス。一ハ高津宮、二ハ長良宮、三ハ熊柴宮、四ハ難波津宮、五ハ宇治雅良御子<sup>ワカ</sup>也。

朱云、

アサカ山カゲサヘミユル山ノ井ノアサキ心ハ我オモハナクニ此歌ハ、葛城王ヲ陸奥ヘツカハシタリシニ、ツカサゴトロロソカ

いかれる躰の見え給へば、都よりあふみの采女と云美女をめしぐせられたり。御盃とりて一首の歌をよみたりしかば、そのなさにめで給ひて、御さかづきとりてたびくめぐり、在明の月の更るまで御酒宴ありけり。あさか山の山の井のあさき心のごとく、民は都上臈ともしらず、もてなす程をしらずあさく思ひてあり。是は下司にてしらぬとゆふ心をよめり。大君やがて心得給ひて打解給ふ。葛城王は橋の諸兄卿の事也。詩の正義に云、「(14才)毛詩にいはく、論功頌徳歌也、心僻防邪訓なり。

あさか山のことはうねめのたはふれよりと云也。何波津の歌よりのち三十一字絶て二十余代歌なし。天智天皇の御時、又歌出来たり。かつらぎの大君と云人、始て橋の性を賜て大政大臣となる。此人にはじまれり。みちのくのかみにてくだりたりし事あり。歌に云、

あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくも人をおもふ物かは  
人王第二の歌也。采女の歌也。心委細の口伝もなし。正義と云は、諸者論功頌徳歌と云。心僻防邪を訓。此あさか山の歌は心僻防邪を歌也。」(14ウ)

一、六義と云事、風賦比興雅頌是也。朱云、今六義の中に、そへ歌よりも下の五は、たゞかぞへ歌也。なぞらへ歌なむどて、うたをかけり。初のそへうたとは証拠をしらず。大鶴の御門をそへ

ナリトテイカレル時、采女ヨミテ君ガ心ヤハラギケリ。葛城王ハ橋  
諸兄ノ事也。詩ノ正義ニ曰ク、毛詩云、論功頌徳<sup>ホムル</sup><sup>コトバ</sup>詩<sup>ウタ</sup>「(12ウ)  
也、止<sup>ヒ</sup>僻<sup>カミラフ</sup>防<sup>ジャマシ</sup>邪<sup>ヤマシ</sup>訓ナリ。

アサカ山ノ言ハウネメノタハブレヨリナリ。難波津ノ歌ヨリ後卅  
一字タエテ二十余代無歌。天智天皇ノ御時、又歌出来レリ。葛城  
大君ト云人、ハジメテ橋ノ姓ヲ給リ太政大臣ニナル。太政大臣此  
人ニハジマレリ。ミチノ国ノ守ニテ下ダリシ事アリ。歌ニ云、

アサカ山カゲサヘミユル山ノ井ノアサクモ人ヲ思フ物カハ  
人王第二ノ歌也。采女ノヨメルナリ。此委細ノ口伝ナラズ。正義  
ト云、詩者論<sup>ロンジ</sup>功<sup>シユウ</sup>頌<sup>ヤメ</sup>徳<sup>ヒラフセク</sup>ト云。止<sup>ヤメ</sup>僻<sup>ヒラフセク</sup>防<sup>ヤメ</sup>邪<sup>ヒラフセク</sup>訓。此アサカ山ノ  
歌ハ」(13才)止<sup>ヤメ</sup>僻<sup>ヒラフセク</sup>防<sup>ヤメ</sup>邪<sup>ヒラフセク</sup>ヲ歌也。

一、六義、風賦比興雅頌<sup>ガセウ</sup>是也。朱云、今六義ノ中ニ、ソヘ歌ヨリ  
モ下モノ五ハ、只カゾヘ歌、ナゾウヘ歌ナンド云テ、歌ヲカケリ。  
初ノソヘ歌トバカリ云テ、其歌ノカキタランハ心得ガタシ。故ニ



奉る也。それをそへ歌とかける也。此心、風の字はそふるとよむ也。又かすかなりともよめり。広韻には風は諷也。毛詩に釈していはく、不行言は、さればたとへばかりにて、其事をあらはさぬはみなそへ歌也。

一、第一風とは、添歌也。これは思ふ事を纏<sup>ヨッ</sup>て外の草木によそへてよめる也。風は色艸なければ、物にあたりてしらるゝ也。其ごとく、風の歌はおもてには見えね共、外の物」(15才)によせて思ふ事をあらはす也。難波津の歌にてしるべし。

て  
おく山の岩がきもみぢちりぬべみてる目のひかりみる時なく

此歌は、仁明天皇の御勅ありて、北山にてよめり。

一、第二賦の歌は、かぞへ歌と云。一首の歌に心あまたある也。朱陽抄に云、さればかぞへ歌とは思事などをそへ、たとへなどもせずして、はからひかぞへてゆふ也。玉篇に云、賦ははかる也。量は称也。称ははからひ也。かぞへたる心也。賦をつくすとも読也。

咲花に思ひつく身の懣<sup>アヂキ</sup>さ身にいたつきの入もおぼえず、し  
られず

又云、さくはなに思ひ付身は愛する心也。身にいたつきは無常也。又云、いた」(15ウ)つきは煩惱也。無常の文字をいたつきと読也。

大鶺<sup>サギ</sup>ノ御門ヲソヘタテマツル歌トカケレバ、此心也。風字ハソフルトヨムナリ。又カスカナリトモヨム。広韻<sup>イシ</sup>ニハ風ハ諷<sup>ホムル</sup>也。毛詩ニ釈シテ云、不<sup>サシテ</sup>レ片<sup>ホメ</sup>譽ハ、サレバタトヘバカリニテ、其事ヲアラハサヌハ皆ソヘ歌ナリ。」(13ウ)

一、第一風トハ、ソヘ歌也。是ハオモフ事ヲカクシテ外ノ草木ニヨソヘテヨメルナリ。風ハ色艸ナケレバ、物ニ当リテシラルゝナリ。ソノ如ニ、風ノ歌ハ面ニハ見エネドモ、外ノ物ニヨセテ思事ヲ顯<sup>アラハス</sup>也。難波津ノ歌ニテ可知。

オク山ノイハガキ紅葉チリヌベミテル日ノ光見時ナクテ

此歌ハ、仁明天皇ノ御勅アリテ、北山ニコモリ侍リ。

一、第二賦ノ歌ハ、カゾヘ歌ト云。一首ノ歌ニ心アマタル也。朱云、サレバカゾヘ歌トハ思コトナンドヲソヘ、タトヘナンドモセズシテ、ハカラヒカゾヘテ云ナリ。玉篇ニ云、賦ハ量<sup>ハカル</sup>也。量ハ称也。称ハハカ」(14才)ラヒナリ。カゾヘタル心ナリ。賦ヲツクストヨム也。

サク花ニ思ツクミノアヂキナサ身ニイタツキノ入モシラズテ  
サク花ニ思ツク身ハ愛スル心也。身にイタツキハ無常也。又云、  
イタツキハ煩惱也。無常ノ文字ヲイタツキトヨム也。文記録ニ云、  
相如野章之庵、喰<sup>シヤウチヨ</sup>蓬<sup>ヤシヤウノ</sup>記<sup>クラヒテモキノル</sup>年序<sup>ジヨヲ</sup>一、忘<sup>ワスレテ</sup>亡<sup>ムシヤウヲ</sup>無常<sup>キク</sup>一聴<sup>ヨロコビ</sup>喜<sup>ヲ</sup>。文ノ

文記録に云、相如野章之庵、喰蓬記年序、忘亡無常聰喜。文の心は、周の世に相如と云人、兵序と云所にながされ、政恵と云卅卷の文を作て王に奉る。王、賢人なりとて赦しかへされ給て、天下の後見となれり。朱云、物をかぞへたるごとくにたしかによめるを、かぞへ歌と云也。

第五にたゞごと歌と云こそたしかなれ。かはりめなし。但かざりたはぶれたるにはあらず、花のおもしろきに付てもかれはそゞろ事也。輪廻の業となれば、花を愛するにも煩惱すなはちたねとなる事」(16才)を歎て、まことの心にとり入てかぞへ歌と云也。

なぞらへ歌と云は、前の物をあげてひとつことばになぞらふるを云也。玉篇に、比は類也。方也。<sup>シナ</sup>玉櫛<sup>クシゲ</sup>笥明て、梓弓いそべなど云。なぞらへ歌の義也。能々わきまへおぼえてよむべし。

一、三比の歌は、なぞらへ歌也。此は物をふたかたへならべて、いづれもおなじ様に云歌也。

君にけさあしたの露の起ていなば恋しき時に消やわたらん  
此歌心は、物はかなくきえやすきに、人の別の悲事のそよきえぬべきをたとへたり。此歌は橘のこれきみが娘を恋て相て別けるによむ也。左大臣長平の歌也。諺の歌」(16ウ)もたらちめとは母也。いぶせきをまゆごもりのうちに入るにたとへたり。不審すれ共、たゞけさの歌にかはらざる也。

心ハ、周ノ代ニ相如ト云人、<sup>ガウガン</sup>岳岸ト云所ニ流テ、政恵ト云卅卷ノ文ヲツクリテ王ニ奉ル。王、賢人也トテメシカエサレテ、天下ノ後」(14ウ)見トナセリ。朱云、物ヲカゾヘタル如ニタシカニヨメルヲ、カゾヘ歌ト云也。

第五ニタゞゴト歌ト云ヘルコソタシカナレ。カハリ目ハナシ。但カザリタハブレタルニハ非ズ、花ノオモシロキニツケテモカレハソバロゴト也。<sup>リシネ</sup>輪廻ノ業トナレバ、花ヲ愛スルニモ煩惱ノ種トナル事ヲ歎テ、真実ノ心ニ取入テカゾヘ歌ト云也。

朱云、ナゾラヘ歌ト云ハ、二ノ物ヲアゲテコトバニナラブルヲ云也。玉篇ニ、比ハ類也。タマクシゲアケテ、アヅサ弓イ」(15才)ソベナンド云ヘル。ナゾラヘ歌ノ義也。

三ニ比ノ歌ト云ハ、ナゾラヘ歌也。此ハ物ヲ二ツ並テ、イヅレモ同ヤウナリト云歌ナリ。

君ニケサアシタノ霜ノオキテイナバ、  
此歌ノ心ハ、モノハカナクキエヤスキニ、人ノワカレノカナシキ事ノキエヌベキヲタトヘタリ。此歌橘ノ是公ガ娘ヲ恋テアヒテ別ケルニヨメル、左大臣長平ノ歌也。註ノ歌モタラチメトハ母也。イブセキヲマユゴモリノイルニタトヘタリ。不審スレドモ、タゞキミニケサノ歌ニカハラザルナリ。」(15ウ)

朱に云、たとへよそへなどするは、みなたとへ歌也。たとへば、かくれたる方をばそへ歌也。あらはれたるかたをばたとへ歌と云也。

一、第四興の歌、是物をきて何かをとりまさと云也。

我恋はよむともつきじ有曾海の浜の真砂はかぞへつくさん  
這授成歌也。不審歌。すまの海人の煙おもはずかたになびく心、  
いづれもおなじやうなれば、まへの我恋はの歌は、伊勢を恋て藤  
原の定方がよめる歌也。すま（17才）の海の歌は、清和の御娘選子  
の内親王を恋奉てなりひらがよむ歌也。

\*「シウ」か。また左傍に「ソシシ」か。

朱云、たゞごとうたは思ふ事をありのまゝに云也。正直なる人の  
世中の物語することし。

一、第五に雅歌は、たゞごと歌也。玉篇に云、雅はまさしき也。  
かくれたる所なく思ふ心あらはす也。

偽のなき世なりせばいかり人のことのはうれしからまし  
此さまなる歌也。忠仁公を恋て染殿の内侍が歌也。とめ歌とはか  
くれたる所なき歌也。山桜の歌もすきすぐとある歌也。

朱云、祝歌とは徳をあげて功をほむる也。頌を祝とよむ也。又は  
ほむるともよむ也。毛詩序（17ウ）云、頌は成徳の形容をほむ。  
以其功告弘神明者也。

朱云、タトへ歌、興ノタトヘトヨムナリ。或ハ花ヲ雲ト思煙ニク  
ラベ、命ヲ露ニヨソヘナンドスルハ、皆タトヘ歌ナリ。タトヘバ、  
カクレタル方ヲバソヘ歌、顕タル方ヲバタトヘ歌ト云也。  
四ニ興ノ歌、是物ヲ並テイヅレカオトリマサリト云也。

我恋ハヨムトモツキジアリソ海ハ、  
此様ナル歌也。不審歌。スマノアマノケブリオモハヌ方ニタナビ  
ク心、イヅレモ同ジヤウナレバト覚ユ。我恋ハノ歌ハ、伊勢ヲ恋  
テ藤原ノ定方ガヨメル歌也。スマノアマノ歌ハ、清和ノ御娘（16  
才）選子内親王ヲ恋テ業平ガヨメル歌也。

朱云、タゞゴト歌トハ思事ヲアリノマヽニ云リ。正直ナル人ノ世  
中ノ物語ヲスル如クナルベシ。玉篇ニ云、雅ハ正キ也。

五ニ雅ノ歌、タゞゴト歌也。カクレタル所ナクテ思フ心アラハス  
也。

イツハリノナキヨナリセバイカバカリハ、  
此様ナル歌也。忠仁公ヲ恋テ染殿ノ内侍ガ歌也。トメ歌トハカク  
レタル所ナキ歌也。山桜ノ歌モスク／＼トアル歌也。

朱云、イハヒ歌トハ徳ヲ上テ功ヲホムルナリ。頌ヲ祝トヨム也。  
（16ウ）又ホムルトモヨムナリ。毛詩序（17ウ）云、頌者美二成徳之形  
容一。以二其成功一告二於神明一者也。

一、第六頌の歌、祝歌也。是は自を祝、他を祝事也。

此殿のむべも富けり幸種の三ば四葉の殿作せり

此歌は、源氏河原院の左大臣の作る河原院をみて、ふぢはらの高藤の内大臣のよめる歌也。さきくさとは檜なり。さかへくさともいへり。三葉四葉は三棟四棟也。文集に云、楊貴妃依天朝之寵、陽国忠寄階呈林之位、家榮三葉四葉。<sup>\*</sup>□詞に三棟四棟也。

<sup>\*</sup>「白木」のような文字だが不明。鷹司本も同様。

朱云、六義は詩より出でたり。詩の心は風雅頌を躰とす。三の文を以て三の躰をあらはす。わけて」(18才)六とす。類に似たれども詩は三也。さきくさは幸也。<sup>サキ</sup>草と云たり。三枝の草と云也。さき草に付て道理にて宜も富けりとはいへる也。檜也。<sup>キ</sup>三葉四葉七なり。七は物のおほきかず也。宜は道理也。七を物のかずとす。世をほめてうへにつくるとは、我事にはあらず、吾人の事をほむるを我より上につくる也。春日野にわかなつみにと云は、正月七日にわかなつみてめぐりて、身のいのりをする事あり。その心をよめる。これはみづからを祝事也。此歌は小野篁の歌也。頌をいはふと読る也。在馬王子世を恨て山野に迷ありき給ふとて、紀」(18ウ)伊国岩代にて松を結て、

岩代の浜まつがえをひきむすびまこと幸さらば又かへり来んとよめり。さきあらばとは幸あらば也。くさは種也。さきくさは

六二頌ノ歌トハ、イハヒ歌也。是ハ自ヲ祝ヒ、他ヲ祝フ事也。

コノトノハムベモチミケリハ、ハ、

此歌ハ、源氏河原院ノ左大臣ノツクル河原ノ院ヲ見テ、藤原ノ高藤内大臣ノヨメル歌也。サキ草トハ檜也。サチクサトモ云。三葉四葉ハノ三棟四棟也。文集云、楊貴妃依天朝之寵、陽国忠早階<sup>ハヤカエリ</sup>ニ<sup>ニ</sup>星林之位<sup>セイリンノニ</sup>家榮三葉<sup>サカヘヨウ</sup>」(17才)四葉<sup>ニ</sup>。三棟四棟也。

朱云、六義ハ自<sup>レ</sup>詩出タリ。詩ノ心ハ風雅<sup>フウガシヨウ</sup>頌ヲ躰トス。三ノ文ヲ以テ三ノ躰ヲアラハス。分テ六トスルニ、タレドモ詩ハ三ナリ。サキ草ハ幸ニ草ト云タリ。三枝ノ草トモ云。サキクサニ付テ道理ニテムベトミケリトハ云ヘル也。檜也。三バ四バ、七也。七八物ノ多数ヲ云。ムベハ道理也。七ヲ物ノ数トス。世ヲホメテ上ニツクルトハ、我事ニハアラズ、吉人ノ事ヲホムルヲ我ヨリカミニツクルナリ。春日野ニ若菜ツミニト云ハ、正月七日ニ若菜ツミテ」(17ウ)回<sup>カエ</sup>リテ、身ノイノリヲスル事アリ。其心ヲヨメル。此ハ自ヲ祝事也。此歌ハ小野篁<sup>タカムラ</sup>ノ歌也。頌ヲイハヒトヨム也。在馬王子世ヲウラミテ山野ニ迷アリクトテ、紀伊国岩代ニテ松ヲ結テ、岩代ノハマ松ガエヲ引ムスビマコト幸<sup>サチ</sup>アラバ又カヘリコントヨメリ。サチアラバトハ幸アラバ也。クサハ種也トモイフ。サキクサハ千草ト云義モアリ。

千草と云義也。

六躰といふは、上躰、中躰、下躰、散躰、藏躰、雜躰、是也。

上躰はうたの概要を初の五の句にもたせる也。是はいと好歌にはあらず。中躰は第一の七句にもたせつる也。下躰は第二句にもたせつる也。是は上品の歌とする也。散躰は心を取ざたする聞えたる所なき也。藏躰は隱題也。雜躰は一題をさだめずしてあれこれをよむ歌也。賦の方なるべし。」（19オ）

一、八躰とは、長歌、短歌、旋頭、混本、折句、廻文、履冠、誹諧等也。

朱云、いまの世中色につき人心花になり、是は万葉より以来をさす也。人の心色々しくなりて、こと葉をかざらんとする故に、花躰ばかりありて、実によりなせる歌なしと謂る也。

色付花になると云言は、世間をとろへて人の心たゞしからざる故に、万事偽にかざれるを云也。好色の家とは実のなき所也。此道かくるべき所なければ、好色の家にたとへ、今の実なきをば埋木にたとへたり。」（19ウ）

一、色に付と云は、情に耽り歌を以てあそぶともいふ也。実なきをしらざる也。人の心ははなになるともあだなる心也。色好の家と云は、歌人の家也。今の世とは古今の時也。そのはじめを思へばとは万葉也。まめなる所と云は、実なる所也。実に此歌をつた

一、六躰ト云ハ、上躰、中躰、下躰、散躰、藏躰、雜躰也。

上躰」(18オ)ハ歌ノ概要ヲ初ノ五ノ句ニモタスル也。是ハイトヨキ歌ニハ非ズ。中躰ハ第一七句ニモタスル也。下躰ハ第二ノ句ニモタスル也。是ハ上品ノ歌トスル也。散躰ハ心ヲ取サダメズ聞エタル事ハナキ也。藏躰ハ隱題也。雜躰ハ一題ヲ定メズアレ是ヲヨム歌也。賦ノ歌ナルベシ。

一、八躰ト云ハ、長歌、短歌、混本、旋頭<sup>セン</sup>、廻文<sup>クツ</sup>、折句、誹諧等也。

朱云、今ノ世中色ニ付キ人心花ニナリ、是ハ万葉ヨリ以来タ」(18ウ)ヲサスナリ。人ノ心イロ／＼シクナリテ、言ヲカザラントスル故ニ、花躰計アリテ、実ニヨミナセル歌ナシト云ヘルナリ。

色付花ニナルト云言ハ、世中オトロヘテ人ノ心タゞシカラザル故ニ、万事イツハリカザレルヲ云也。好色ノ家トハ実トノナキ所也。此道カクルベキ所ナケレバ、好色ノ家ニタトヘ、今ノ実ナキヲバムモレ木ニタトヘタリ。

一、色ニ付ト云ハ、ナサケニフケリ歌ヲモテアソベドモ、其实ナキヲ知ラザルナリ。人ノ心ハ花ニ成ルト云、アダナル心也。色」(19オ)好ノ家ト云ハ、歌人ノ家ナリ。今ノ代トハ古今ノ時也。其始ヲオモヘバトハ万葉也。マメナル所ト云ハ、実ナル所也。実ニ此

ふる家也。  
(以下、続く)

---

歌ヲ伝ル家也。  
(以下、続く)